学生らのアイデア事業化へ

町田・相模原の企業に提案

まちだ未来ビジコン

ZOOMを活用して開かれた最終選考

創業支援施設の協働で開催している「まちだ未来ビジネスアイデアコンテスト」の最終選考がこのほど、オンラインで開かれた。町田・相模原両市の企業（応援企業）が提示したテーマに対し、学生や一般からの参加者が課題をビジネスで解決する事業やプロモーションを提案した。

コンテストは町田新産業創造センター、コミュニーンベース「マチノワ」（オンザウェイ）、ブソー・アゴラ（キープ・ウィルダイニング）の3社が主催で4回目。独創的なアイデアや技術を持つ若者や女性などの起業家を町田市やその周辺地域から発掘し、同センター内個別ブースの無償利用や情報提供などでビジネス化を支援する。

学生や一般から合計47件の応募があり、募集企業1社につき1件ずつ最終選考にノミネートされた。市や商工会議所、金融機関などが新規性や実現可能性の有無、社会貢献度の高さなどをポイントに審査を実施。大賞1件、準大賞2件（学生・一般の各部門）、きらぼし銀行賞1件、オーディエンス賞1件を選ぶ。

応援企業は、相模原市内からもカズテクニカ（中央区中央1）やグローズバル（同区相模原1）が参加。町田市内企業3社のほか、小田急電鉄も町田駅周辺のまちづくり・賑わい創出についてテーマを投げかけた。

カズテクニカは、自社製品「IoTモジュール」を活用して、地域の課題解決に役立つ新しいサービス・商品のアイデアを募集。首藤映さん（相模女子大学大学院）らのチームはこれに対し、歌手やアイドルなどのファンサービス、ファンからのメッセージなどをスマートフォンで可視化できるグッズというユニークなアイデアを提案した。

「キュン♡（ハート）」はIoTモジュールを搭載したリングとイヤーカフで構成。舞台上の演者がリングから電波を出すことで、ファンのイヤーカフにメッセージなどのファンサービスをリアルタイムで届けることができる。商品の発売をコロナ収束後の時期と想定し、いまだに根強いリアルライブ需要に乗った展開を見込む。

グローズバルに提案した小倉由公治さん（同大学院）らのグループは、医療従事者としての経験から、外食を控え、GoToキャンペーンの恩恵を享受できない医療従事者の食事を支援する「食卓救急」を提案。飲食店と医療機関が提携する福利厚生システムで、医療従事者に対し専門的に食事を提供するデリバリーサービスとなっている。

小倉さんは「医療従事者に心のこもった食事を提供できるとともに、調理師にとっても働きがいの再構築になる。配達前日に受注する際に、食べたいものや量、健康状態などヒアリングを実施。注文を通じたコミュニケーションが信頼関係の構築につながり、温かい料理の提供につながる」と説明している。

準大賞に選ばれた小倉さん

同社の吉田茂司社長は「利益を追求すると生産性が低い工程を省きがちだが、企業理念である〝愛情〟の部分が減ってしまうのではないかと考えた。生産性向上のためのコックレス化が進むなか、愛情あるおいしい料理を提供するためには」との課題を提示した。

◇最終審査「まちだ未来ビジネスアイデアコンテスト」の最終審査会が2月20日に開かれ、大賞以下5件の受賞アイデアが決まった。

大賞は、介護施設紹介のケアミックス（町田市中町1）の課題に答えた相模女子大の学生グループが受賞した。相模原市内企業では、グローズバル（中央区相模原1）のテーマに提案した小倉由公治さんら相模女子大大学院の学生グループが準大賞（学生の部）、カズテクニカ（同区中央1）に提案した首藤映さん（同大学院）らのグループがきらぼし銀行賞となった。

主催者を代表し、同センターの木島暢夫社長（町田市副市長）は「これまでも学生と企業の連携、事業者の販路拡大など大きな成果が生まれている。応募者の独創的なアイデアがビジネスにつながり、町田市内の産業の発展・成長に寄与するものと期待している」とあいさつした。

株式会社 カズテクニカ